Special Program・特別プログラム

「風・香・彩」二十絃箏　GAYOの音と共に

＜出演＞ 中垣雅葉

＜プロデュース・司会＞ 工藤毅志

「山のシューレ」の最終章。那須の自然のなかで過ごした5日間の興奮の余韻に浸りながら、二十絃箏の響きに包まれる時間。ゲストは装いも新たに、いっそう華やかにおしゃれをして、ご参加。シャンパンを楽しみながらのパーティをもって、いよいよフィナーレを迎えます。

次々と思い出される文化と自然の交歓の物語

これから始まる「結び舞台」。いよいよ 2010 年の「山のシューレ」も最後のプログラムです。演奏会のプロデュース・司会の工藤毅志さんから、講師の皆さんへの感謝の言葉に続いて、二十絃箏の演奏者中垣雅葉さんが紹介されます。

最初に軽やかに奏でられたのは「オーバー・ザ・レインボウ」。今年のテーマ「自然の叡智」への想いを、箏の音色が多彩に結んでいきます。

続いて、生誕百年を迎えたショパンへのオマージュ、ピアノ曲「雨だれ」。二十絃箏の演奏が続きます。イギリス民謡「埴生の宿」。雅葉さん作曲の「トリニティ」。ハンガリーを訪ねたときの国旗の色「緑、白、赤」に感じた「自然、純粋な心、戦いの歴史」への想いを込めた、ドラマチックなメロディ。

続いて、少し休憩タイム。そのあいだに、雅葉さんが楽しく、二十絃箏のミニ・レクチャーをご披露してくださいました。奈良時代、唐から日本に伝わった十三絃箏は、基本の調弦として一オクターブ五音階。二十絃箏は七音階の調弦に固定して、五線譜で書かれた現代の音楽を奏でることができるようになったそうです。「箏を触りたい人は、どうぞ」という呼びかけに、さっそく近づいてこられたのは、日本で初めて雅楽を修めたフランス人の青年。とても「山のシューレ」らしい場面が飛び出します。会場では、ムッシュ宮﨑の手による、ピンチョス・スタイルのお料理も供されて、にぎやかです。

リラックスした会場に、「さあ、特別なプレゼントがあります」と演奏されたのは、「結び舞台」のタイトル〈風・香・彩〉にちなんだ新曲。二期倶楽部の自然の風、森、木々のざわめきをイメージして雅葉さんが作られた、できたてほやほやの曲です。夏の自然を讃える迫力ある演奏に、盛り上がりも最高潮。踊るように走る手、絃を縫うように舞う指。さらに二十絃箏の真髄を伝える二曲。「サヌールの舞姫」「白い風の下で」。雅葉さんと二十絃箏の出会いとなった「華やぎ」。最後に、懐かしい「月の光」が静かに奏でられて、会場は大きな拍手に包まれます。

「山のシューレ」の催しはまだ終わりません。用意されたサプライズは、「開き舞台」で芭蕉を演じて那須の幻想へ案内してくださった能楽師安田登さんとのコラボレーション。「古くから伝わった琴は、日本では神霊をおろす楽器でした。雅葉さんの箏の音色に、初日とはまた違った夏目漱石の夢十夜〈第三夜〉を謡ってみたい」。安田さんの朗々たる声、雅葉さんの二十絃琴が夜の不思議な物語を生々しく響かせて、引き込まれます。「夢の通い路たどり来て行方やいずこへ定むらん……」。

自然が語りかける叡智に耳を傾け直すために、私たちはこの世界に、これから何を試みていけばいいのか。さまざまな講義やワークショップを通じて、一緒に確かめ合った日々。最後に「山のシューレ」の総合プロデューサー北山美優さんからの感謝のメッセージが熱く贈られました。

森と庭、里山に包まれた那須の夜が深まっていきます。たくさんのゲストの皆さん、講師の方々と、幸せにもこの場所に集えた喜びを共にしながら、五日間の手応えを結び合ったフィナーレでした。